雨の文学

――樋口一葉考――

塚田満江

一

市井の只中にあって、貧窮と明治の「家」の重みの二重苦を背負って生きていた若い娘であり、しかも創作に志す女であった樋口一葉にとって、その現実は、細く狭い視野の範囲で把えられたものながら、鋭く・つよく・厳しい印象を心奥に刻みつけるものであった。

その意味で一葉の日記は、彼女自身を理解する鍵であると同時に、その創作意欲が縦横にほとばしり出た私小説とも名づくべき、所謂「文学」の範疇にも入り得るものであることは、繰返し説かれているところである。

一葉に親しんでまだ日の浅い私にとって、その日記は読み直す毎に新しく何ごとかを語ってくれる。大げさに言えば、一葉の魂のささやきを訊く思いで受けとったものを、ここに「雨の文学」と名づけて記してみようと考えている。断るまでもなく、この思いつきは単に日記を一読した結果の恣意的なものではなく、名作「たけくらべ」に於ける信如と美登利の交渉を悲しく美しく印象づけるための重要な役割を持つ「雨の日」（巻十・十一・十二・十三）の描写、「にごりえ」の悲劇を決定づけるお力と朝之助の雨の日の出逢いの設定に示される作者の深くたしかな関心、晩年の随想「雨の夜」（読売明治二十九年九月二十日）の珠玉の文章、等に於ける文学的結晶の見事さの発想源を探ろうとした意図からに他ならない。

二

一葉の日記（以下本文は昭和二十八年筑摩書房発行の一葉全集による）を読んでいると、所謂「日記」によくある晴雨の天候の何気ない記録であるのに、妙に「雨」が多い気がしてならない。試みに晴天と雨天を数え分けてみて、特に雨（雪や霙をふくめて）が多いわけでもなく、むしろ晴れもしくはそれとおぼしい方が数ではまさるのに、やはり私には雨が降り続いているという錯覚を拭い去ることが出来なかった。

こうした天然現象と一葉の関係を、単に自然観の面から考えると採りあげること自体ものずきにすぎず、結果は些々たる資料を提供するにとどまるであろう。

日本人の自然感情が、月雪花の天然現象に促され、左右されたところから発する純然たる受身のしかも恣意的主観的感動に始まり、その歴史の繰返しに終始するものであることは、和歌、物語りの世界のよく示すところである。一葉に於けるそういう古典の摂取が、彼女の文学形成の上に欠くことの出来ない重要な役割を果していることを思えば、雨、雪の降るもの、月も満月よりはおぼろ、雲隠れを愛した伝統的な美意識に随ったものとして、「雨」に惹かれたといってもとりたてて問題は生じ得ない、と言えよう。

が、改めて、一葉そのひとの心的体験にそって雨の日を検討するとき、天候という偶然の事実が、恰も必然的に招来された如く想えるまで、一葉の生は、雨の日の閉じ籠められた暗うっと、胸までぬれる心細さにおおわれたものであることを、しかも、その魂にふる雨が作品の中に、心をわけて降る雨として生かされていることを教えられた次第である。早急に結論を述べれば、一葉の文学に於ける雨は、その悩み多くそれゆえに一層彼女の創作意欲をそそってやまなかった現実の日々に、さまざまの心の体験を彼女に与える役割を積極的に果していると思われてならない。後に詳しく述べるが、しかも、雨の日の彼女の肉体は、夭折の宿命を背負った不治の病いの兆しを年毎に月毎に強く感じている。意識的には甘く或いは切なく身をかむ思いの日であり、意識下にはたえず生命をおびやかされつつ、それゆえに一層己が生命をわける創作へかりたてられる、という重大な役割をもつのが「雨の日」なのである。

以下、日記の現実を辿りながら、やがて、それらが集約されて、その作品構造の上に決定的な支配を及ぼしている様相を観てゆきたいと考えている。

三

明治二十四年四月十五日「雨少しふる。今日は野々宮きく子ぬしが、かねて紹介の労を取たまはりたる半井うしに、初めてまみえ参らする日なり」にはじまる、一葉の文学の悲恋的要素を決定的にしたと見られる半井桃水との出会いの記録がある。「耳ほてり唇かはきて、いうべき言もおぼえず」無我夢中の、男に馴れていない小説志望の小娘にとって、世馴れた桃水の温かいもてなしを、この世離れた場に居るような「いや降りに降りしきり」する雨の音を、むしろ、救われる嬉しさで聴いたことであろう。

二十二日に訪ねて原稿の批判を受けた一葉は、小宮山即真に紹介して貰うために、廿六日に又、桃水を、今度は自宅ではなく下宿先へ訪れる。

「空は、いつのまにか黒きくももておほはれはて」ていたが切れ間を見て家を出ると、まもなく「又くろき雲おびただしく出来て、雨俄に盆をかへす様に成ぬ」中を、同じぬれるならとねんじて行き着いてしまう。

一葉は、女友達にもあまり心を開いて語ったこともないであろうわが家庭の貧しさを打明け、桃水は男女の交際の難しさを説いて、しらずしらず彼に甘えかかろうとする一葉の胸の奥を刺している。

例刻に訪ねるようになった六月三日には「あやし、君来給ふ折には、必らず雨天なるも」と桃水が笑う。が、一葉は、つい心浮きたつまゝに口軽く言った冗談を、桃水が真面目に領いてくれた方が強く心に残り、その恥かしさともやもや騒ぐ心を抱いたまま帰宅した

あと、いたく降った雨が話題となって母や妹に動揺をさとられないことが、またも救いとなっているようである。

桃水に呼ばれてゆく日（六月十七日）の前後、「胸つぶ〳〵と鳴ここち」して、一晩中眠れない一葉の耳に、夜もすがら大雨の音が昂ぶる心の伴奏のように鳴りひびき、訪ねて帰る夕暮「思ふことある身には、みる物聞くものはらわたを断ぬはなく、ともすれば、身をさえあらぬさまになさまほしけれ」とまで、慕情に溺れてゆくのである。

かくて、年は終り、明治二十五年一月八日年頭の挨拶にことよせてなんとか桃水に会いたいと「かゝる筋のこと、世の人もれ聞ましかば何とかいふらむ。」と自責するほどうろうろするが、ようやく二月四日、連絡がとれて、「十時ごろより霙まじりに雨降り出づ」る中を、「よし、雪ならばなれ、なじかは、いとふべき」と家を出てゆく。隠れ家を訪ねながら、正午までもまだ寝ている桃水を起しもせずに、小一時間も待った一葉は、独り暮しの彼に女らしい心遣いを見せながら、泊れと言われるとむきになって断り、「白がい〳〵たる雪中。りん〳〵たる寒気をおかして帰る。中々におもしろし」と吹かゝる雪にさえ立向うような、気負いたち燃え立った思いに達している。貧に追われながらも、小説もはかどっているが一方この頃、一葉の肉体をむしばむ病いの兆しと考えられる頭痛が始まっている。即ち、二月廿三日「雨天、寒し」とあり、「風邪にやあらん、頭痛たへがたければ此夜は早くふしたり」とあるが、風邪ではなかったことが続く日記によっても分る。やがて晴天でも雷のなる日などに「かしらいといたくなやむ」記録が頻出するようになり、明治二十六年四月（蓬生日記）廿五日に到って、前夜からの六雷雨のおそろしさも何も耳にいらぬほど「かしらただなやみになやみて」「胸さへもただせまりにせまりてくるほしければ」と悪化している。

しかし、二十五年初頭の一葉は小説の趣向をこらし、図書館に通い、桃水を訪ねて、幸せであった。雨にも雪にも立向うべしの気迫もあり半井うし訪うために母に髪を結ってもらいながら、「わが親子計たのしきものありや非らずや」と弾んで「我が半井うしへ行時として雨天か風かにあわぬは無し」と例に違って晴れるのをむしろおかしがるほど、雨も風も一葉には親しくなつかしいものと変ってゆく。

もはや桃水と小説の趣向を語る他になんの喜びも覚えなくなった一葉は、歌塾の人と梅見にゆくという前夜の如きは、「哀、人は好天気なれかしと待つらむものを、我為には降りてくれよかし」と祈り、「天ふれかし心あらばと打歎かれ」た甲斐あってか、雨降り出でて、「万歳ともとなへまほし」と感激している始末である。

四

新聞小説作家という華やかな仕事の反面、借金に追われて世にかくれがちの桃水と会う喜びのために雨を喜び、すすんで雨を求めるまでになった一葉の現実は「雨傘というもの一つもなければ、小さやかなる洋傘にしのぎ行く。雨はただ、いる様にふるに、いと高き下駄の爪皮もなきをはきて汚泥なる道を行くに困難なることおびただし」（明治二十五年三月十四日日記）という貧しさである。具体的には雨に苦しめられ、雨と闘うことを余儀なくされながら、一葉の思いは、雨を求め桃水を求めいつしか全身でよりかゝろうとして

いる。病気見舞の日も「朝来大雨なれどもおして家を出づ」（明治二十五年四月三十日）る打込み方であった。

が、岡焼きか、世の道理か、一葉の誤解か、桃水との絶交（一葉の側からだけ考えられた）に事態は急転する。

そして一葉の心に燃えあがった見当外れの、しかし彼女には切実な桃水への憤りの火がやがて衰えはじめたとき、かっての自然の雨、一葉のそのなつかしきものが、本格的に、たしかに、永遠に晴れぬかの如く胸の奥に降りつづけるようになるのであった。

「今しもかう無き名など世にうたわれ初めて」、「口惜しとも口惜しかるべき」と桃水を恨みつゝ「此頃降つゞく雨の夕べなど、ふと有し閑居のさま、しどけなき打とけたる姿など、そこともなくおもかげに浮びて、彼の時はかくいひけり、この時はこう成りけれ、さりし雨の日の参会の時、手づから雑煮にて給はりしこと、母様のみやげにし給へとて干魚の瓶付送られしこと、我参る度々に嬉しげにもてなして、帰らんといえば、今しばし〳〵君様と一夕の物語には積日の苦をも忘るるものを、今三十分二十五分と時計打眺めながら引止められしこと」と、くりごとの雨音を途絶えることなく自らに呟きつづけている。

「あれも夢也、是も夢なり」と観じ、「行水のうきなも何か木のは舟ながるるままにまかせてぞみん」と、世捨人の心になり果てようとする一方、「ある時は厭ひ、ある時はしたひ、よ所ながらもの語りきゝて胸とどろかし、まのわたり文を見て涙にむせび、心緒みだれ尽して迷夢いよいよ闇かりしこと四十日にあまりぬ」ほども哀しく、切なく、雨の音を聴きつづけてあくことがなかった。

しかも、一銭入金の当もなく、借金と利子払いにひき廻された年月もまた止まず続いて二十六年一月二十九日「夜いたう更けて、雨だりのおとの聞ゆるは、雪のとくるにや」と起き出で、「ここら思ふことをみながら捨てて、有無の境をはなれんと思ふ身に猶しのびがたきは此雪のけしきなり」と解けることなく、晴れることのない思いを又辿ってゆく。

二月六日、「空はくもり又雨なるべし」と人々は言い、「かしらはただいたみに痛みて何事の思慮もみなきえ」る頭痛の中で、一葉は執拗に、文学の美とは？　と追ひ求めている。まことに、くりごとも述懐も影消えた一個の妄執の相そのものというほかはない。

雪がふっては、「火桶をはさみて、ものがたりのどかに」した日を思い、「雨天」には、「唯身にせまりくるがごと、おもかげのまのあたりにみえて、得堪ゆべくも非ず。」（六月二十一日）と、六条御息所の執念もかくやと自らも認めている。

ここでは、ただ失われた恋の相手を追うだけではなく、その相手に働きかけてゆく己が慕情をたしかに把えて、自分の心の中に貯わえようとくいさがっているねばりがある。この執念こそ「文学」を支える、高い教養や深い知識にもました強靱なエネルギーなのではあるまいか。

かくて、五月廿七日の雨の日の述懐は、一葉の執念の極北を示している。「一あしはすすまんことをねがい、一あしは帰らん事をおもう我心、そも何ものぞ。憂ひ来たりては彼の人をおもひ、力よわくしては彼の人をおもう。よし、今は更に人ともいはじ、清らけき眼ともいはじ、匂ひやかなる口ともいはじ。何と得しれぬ一物の、

唯其人の名のりするものの、ひしひしと身にせまりくるこそ悲しけれ」と悶え、「あやし我こころは二つあるか。かたへより見れば、浅ましくもをしく、かへりては、おろかに、いやしくさへおぼゆるを、今一方にては、よし此身あればこそ、かかる物思いもするなれ。淵にも入らなん、海にもしづまなん。すべて、うき世のそしりも厭はじ。親はらからの歎きもおもはじなど様にさへ思はるるよ」と愕き、歎き、「あはれ迷ひはいつの日にか晴れん。まことの美をばいつの日にか見む」と慟哭している。

神ならぬ身の一葉は、やがてふたつ心あるこそ人間なりと悟る日の、人間開眼の日の、そしてその日の雨のたしかな実感とを、知るよしもなく、声をのんで哭いていたのであった。

五

明治二十六年七月、起死回生の途を求めて一葉は、母と妹をはげまし立てて、竜泉寺町に、荒物屋とも玩具屋ともつかぬ小さい貧しい店を出し、身をもって世の荒浪に立向うこととなる。

七月廿日、薄曇りの日の引越しの夕べから、稲づま恐ろしく光る大雨となって、一葉の淡く彩られた過去との訣別を命ずるようにひと夜降りつづけている。

「唯かく落はふれ、行ての末にうかぶ瀬なくして朽も終らば、つひのよに斯の君に面を合はする時もなく、忘られて、忘られはてて、我が恋は行雲のうはの空に消ゆべし」と絶ち難い未練に「むねつとふさがりていとゞねぶりがたく」暁を迎えた一葉も、月を越えて八月三日、雨の夜の記録は、ぐっと姿を変えてきている。

廓によみうりして生きる女、茶屋かし座敷の実態、迷子の親について、去年の頃の綿々とした述懐に代るむしろ突き放した写実の態度になっている。

ものを思いものを眺める毎に雨の日の軒ばをつたう雨だれのように一葉の心緒につきまとった桃水の面影も、ここでは、はたと消えている。確かな身構えで、現実に対した一葉の覚悟も、商いを棄てると同時に消え去ったかに見えたが、街の易者久佐賀義孝をただひとり偽名で訪ねた（二十七年二月二十三日塵中日記）から、彼との虚々実々の交渉が持たれる五月頃までの記録は、一葉の生涯に一度の冒険とも、破格の行動とも名づくべきもので、雨も雪も乾ききったような文体とものの観方を示している。それも束の間の心のうつろいであったのだろうか。あるひとときの、自棄的なかけであったのだろうか。

明治二十六年十一月十五日、一葉は三ヶ月振りで、師中島歌子を訪ねている。

装いの貧しい娘心の嘆きを知ったのも、女友達のそれぞれの心の裏表を知らされたのも、人間の醜さを見たのもこの塾であったが、ある時は、わが家以上に馴れ親しんだ師弟の仲でもあった。「かたみにはんとする事多かり。思ひせまりては、涙さへさしぐみて、とみには詞も出ず」というほど感動しながら、ひと度び、市井の日々に徹して逞しくものを観る眼の出来つつあった一葉は、ひたすら傾倒していた師をも、「こころの中の金剛石をすて、さのみ野山にもとめ給ふらむ」とひそかに批判している。しかし、ともかくも、煩わしい家の重荷から、ひと日放たれた感の一葉は「家にありては、さりともおぼえざりし惑（まどい）の、此処の景色にもよふされてにや、何故

とはしらず、涙さへさしぐまるるよ」と、くずおれる思いを「あなものぐるほしや、我れにこころ二つあるか。もしはこころに真偽あるか。こころにむかひて、こころの偽をいふか」と、またも愕きながら、今は相反きつつ共に胸に生きる二つの思いをぢっと視詰めることの出来る一葉となっている。「あやし我がこころは二つある」（前出明治二十六年五月二十七日）の愕き哀しみ悶えたままに終った幼ない感性が、いつしか世の闘いに鍛えられ、人間を観る眼、自らを見究める態度に育って行っているようである。

人間の内部に対立する二つの心、ふたつの相、それを心理学は、内面の矛盾と言い相剋と考える。文学に於ける人間性もまた、この相反するふたつの心を内包するものと解され、その対立相剋の心理的葛藤を描出することに近代作家のひとつの喜びと苦悶があった。一葉がそういう人間の本質に触れるに到った桃水再訪の雨の日はやがて述べよう。

貧困のどん底で、母と妹を背に起ち上った一葉の冷たいまでに乾ききった心も、どうにも馴染むことの出来なかった商いを思い切ったあたりから、再び静かにうるおい温まってくるようである。「小説のことひろくなしてん」の口実を我と家族に言いきかして、二十七年三月二十六日、二年振りに晴れて桃水を訪ねる思いを「あづさ弓いる矢の如き心の、などしばしもとゞまるべき」と、再び認めたときから「雨の日、つれづれと文机によりそひて文ども取散し、その人の筆のあとなど、そこはかと見すさぶもあはれなり。かうやうのこと、人にはゆめいふまじかりけり」と、雨の心を独り大切に抱きしめるようになっている。

六

「みづのうへ」は、明治二十八年五月の日記である。

十七日、「一日雨ふる」日に、「けふの一葉は、もはや世上のくるしみをくるしみとすべからず。恒産なくして、世にふる身のかくあるは、覚悟の前也。軒端の雨に訪人なきけふしも、胸間さまざまのおもひをしばし筆にゆだねて、貧家のくるしみをわすれんとす」と孤独を愛し雨を愉しみ、はじめて一葉は「家」を越えて、ひとりある我を凝視する境地に到りついた。

六月三日桃水を訪れ、鶴田たみとの間に出来た子と一葉が誤解しているままの、五つの娘と遊び、四年振りに桃水の笑顔をみあげて、少女のように胸をふくらませているが、一方、「此人ゆゑに、人世のくるしみを尽して、いくその涙をのみつる身とも思ひしら」ぬ桃水を視詰めつつ、「我身に諸欲脱し尽して、仮にも此人と共に人なみのおもしろき世を経んなどかけても思わず。はた又、過にしかたのくやしさを呼おこして、此人眼の前に死すとも、涙もそそがじの決心など大方うせたれば、ただなつかしくむつまじき友として過さんこそ願はしけれ。かく思ひ来りて此人をみれば、菩薩と悪魔をうらおもてにして、ここにまことのみほとけを拝めるやうの心地、いひしらずうれし」と、人間桃水を見究めようともしているのである。その日も「道にて雨にあふ。此よは大雨也」であった。もはやその雨は、むかしの嬉しい雨でも侘しい雨でもなつかしい雨でもなく、降るべくして、一葉の心のうつろいの終えんに降った雨であった。

「にごりえ」に続いて「十三夜」「わかれ道」を出して、「女流中ならぶ物なし」（水のうへ、明治二十九年一月六日）とたたえら

れた一葉は、それらの騒々しい賞めことばを、「こゝろぐるしくも有るかな、しば〳〵おもうて、骨さむく肉ふるはるる夜半もあり」と、自戒のことばにおきかえて、記している。

「水のうへ」に続く「みづの上」の筆のはじめに、「雨じたいの音軒ばに聞えて、とまりがらすの声かしましき」日の、文机に独りもの思う一葉は、雨音の染み入るように己が心に言いきかせ、語りかけている。

「みたりける夢の中には、おもふ事こゝちのまゝにいひもしつ。おもへること、さながら人のしりつるなど嬉しかりしを、さめぬれば、又もや、うつせみのわれにかへりて、いふまじきこと、かたりがたき次第など、さまざま有る。しばし文机に頬づえつきておもへば、誠にわれは女成けるものを、何事のおもひありとて、そはなすべき事かは」「我れをしるもの空しきをおもへば、あやしう一人この世に生れし心地ぞする。我れは女なり。いかにおもへることありとも、そは世に行ふべきかあらぬか」

孤影悄然と、自ら問い答える孤独の「生」のなかに、一葉は己の生きる途を見出し、それを文学の世界に移すことを希ったのではなかったろうか。桃水を初めて訪ねたころの、気負い、昂ぶり、弾んだ調子が、ようやく沈みきって、いぶし銀のような美しさに光る文体となっている。二十八年二月一日村上浪六を訪ね、降りこめられて身上ばなしを訊くところは、短篇小説とも言える位すっきりときめこまかくまとめられている。

「君が筆に一転化の来るべき時機なめり」「君が境界は誠に詩人の境界なるかな」と一葉をはげました川上眉山がはじめて訪れたのも「雨やまずして空くらし」日（明治二十八年五月二十六日）であったし、異性のよき友であり時には厳しい批評家であった斉藤緑雨と心ゆくまで文学を時勢を語りあったのも雨いよ〳〵降りしきる夕べであった。（明治二十八年五月二十九日）

同じ年七月二十日、雨風おびただしい午後二時ごろ、おそらく一葉が、鷗外緑雨より尊敬し、その著を愛読もしていたと考えられる幸田露伴の訪問を受けている。三木竹二を交えての笑声に充ちた語らいの場面は、細かく長く、記されて二人が辞し去って「いまだ十間ならじとおもふに、大雨車軸を流すが如く降りくる。」と結んである。

眉山、緑雨、露伴等との交りの日に降った雨は勿論偶然であった。その他の或いはこれまでの私が採りあげてあげつらった雨も天然の現象としては、皆偶然のものである。ただ、一葉がそれを偶然と思わなかったということを、そして、雨の日の思いを飽くことなく追い求め、己がものとすることによって、彼女の「生」の象徴にまで高めて行っているということを述べたかったのである。

七

雨の日に目覚めた初恋の慕情は、儒教的倫理の下に正しく清く生きようとした一葉にとって、人間の弱さであり、そして醜さであった。

負けん気の強い彼女にとって、他人の前では絶対に見せることの出来ない「罪」であった。ふりこめられた雨の日、雨の夜に、独りひそかにとり出して自らの弱さをいたわりつつ、そのために、自責の念にかられて苦しみ悩む誠実さを、又そのままに生きることの可能な、そういう雨の日なのだった。降り続く自然の雨を聴きながら、

一葉は、同じようにうどめき訴えつづける心の悶えを、細やかに鋭く視つめつづけている。こうなると雨は単なる似つかわしい背景ではなくて、雨によって「生」を求め、雨に支えられて生きようとする。積極的な働きかけの態度になってくる。

それらの心のうつろいは、自然の現象に誘い出されて起り、それから導き出されたものではなくて、自然の雨と対峙しつつ、しかもその中核に進んで生き抜こうとしているとでも言えるのではないだろうか。

そこには、古典の権威に支えられた伝統的な自然美を越えた独自の新鮮な感動が「雨の日」から、溢れ出ていると思われるのである。雨を得て人間の「生」の哀しみを描き出した一葉の一生は、降りこめられて心を晴らすよすがもなく終ったようである。が、その創作の場に於いて、雨は一葉の意のままに作中の人々の上に降りそそいでいる。

「たけくらべ」巻十から十一にかけて、深い矛盾と、微妙な牽引の情をからみ合せた信如と美登利の出会いの場は「秋雨しと〳〵降るかと思へばさっと音して運びくる様なる淋しき夜」以外の設定を考えることが出来ないほど二人の心理に密着している。

それが、十二から十三にかけて、十、十一の、「出会い」とはいえ、はかなくすれ違わせたもの足りなさ、切なさを、真向うからの対峙によって、二人の思いのひだ〳〵を心憎いまでに描き出してみせるのである。

美登利の心中の象徴のような紅入友禅は雨にぬれた紅の色が冴え、雨にうたれて布地のなえているがゆえに、信如の思いをも含めて、鮮やかに印象づけられるのである。

それはむしろ、別離の場に残された水仙の作り花よりもっと鮮明に、もっとふかく強く、この世に生きることを見すてられた慕情の悲愁を測々と訴えてやまないと言えよう。

かくの如く、作者自身の心のうつろいの転機に或いは昂まりの場にさまざまの形でふり続けた現実の雨が、その作品に投入されて、作中人物の心理とからみ合い融け合って、美しく、愛しい感動を創り出している例を私は他に知らない。敢えて、一葉の作を「雨の文学」と呼ぶ所以である。

（一九五九年七月三十日）